東京新聞「談論誘発」
２０１２年１１月２０日

高齢化する東京近郊都市

藤井（ふじい） 信吾（しんご）氏　茨城県取手市長

1959年生まれ。第一生命保険を経て2007年より現職。現在２期目。

「健幸」なまちづくりをしよう

取手市は、茨城県の南端に位置する人口十一万の市である。取手と言えば一九八四年に清原・桑田を擁するPL学園を破っての高校野球の全国制覇が、今でも語り草になっている。上野駅からJR常磐線の特別快速で約三十分。取手市のように東京圏のベッドタウンとして昭和四十年代に急速に人口が増え、二倍、三倍になったような市は、これから一挙に高齢化が進むと予測されている。

生産年齢人口に対する高齢者人口の割合が高まることから、社会保障を支える財源問題や、にぎわい・活力の維持といった諸課題が噴出して来よう。

しかし、財源論からのアプローチより先に行うべき手だてが別にあると私は考える。それは、その土地に住まい続けることを幸運と確信する人を、一人でも二人でも増やしていくことである。

私自身、前職の生命保険会社に勤務していた時に、通勤至便で終電も遅い取手をマイホームとして選んだのがご縁である。朝の通勤でキジに出くわしたり、カブトムシやクワガタのいる樹木を発見したり、折々の新鮮な発見はあったものの、平日の通勤に相当の時間を取られるなかでは、身の回りの豊かな資源を本当に気付くのは難しい。自然・景観はもとより、スポーツへのアクセスのしやすさ、助け合うコミュニティー、活動分野の広がりといった身近な素材が実に豊富であることを、残念ながら体感できていなかったのだ。

これからの時代、首都近郊都市は、地域らしさを強め、住民自身の参画の喜びを高めていくさまざまな取り組みが求められる。自らの心身の健康だけでなく、周囲との健全な関わり方が重要だ。健康で幸せに暮らせる新しいまちづくり、「健幸」まちづくりに取り組みたい。

とてつもない長寿社会が到来するのであれば、病気や不安にさいなまれず、健康で安心感に満たされた長寿をこそ求めたいと思う。そのためには、アクセスしやすい場所に運動や適切な食生活の指導が得られる環境が大事であり、コミュニティーや地域として健康を志向していくという方向性を明示すべきである。

チューブ体操をする人たち。身近な場所で運動が楽しめる環境が重要になっている＝今年２月、茨城県取手市で（同市提供）

取手市は、地域が連携しながら市民の生涯にわたる健康的なライフスタイルを確立するため総合的に取り組むことを目的として、二〇一〇年から、筑波大学大学院の久野譜也教授が主宰する「スマート・ウエルネス・シティ首長研究会」に加入し健康まちづくりに注力している。これまでも、チューブ体操指導者の会やシルバーリハビリ体操指導士の会などが市民の健康づくりのために精力的に活動してきた。教えながら自らも学び、はつらつとして惜しまず働き、輝いている。しかも、人への貢献がうれしいのだ。

健康・医療・福祉・環境を一体として整備するウェルネスタウン取手を推進していく。健康づくり、友達づくりで地域貢献するたくさんの「笑顔」こそ、取手市のこれからの地域らしさのシンボルである。

談論誘発
読者の皆様のご意見を募っています。首都圏編集部「談論誘発」係へ、ファクス(03-3595-7080)、Eメール(syutoken@tokyo-np.co.jp)で。